

目次

鉄路のオベリスト

C・デイリー・キング 5

手がかり索引 373

『鉄路のオベリスト』連載を終えて 376

訳者あとがき（カッパ・ノベルス版） 380

オーム教奇譚

ミルトン・オザーキ 385

夢果てぬ

レオナード・ロスボロー 429

茶色の男

C・G・ホツヂス 471

二重殺人事件

R・カールトン 513

編者解説 日下三蔵 549

鉄路のオベリスト

C・デイリー・キング

主要登場人物

- サボット・ホッジズ……………インタナショナル都市銀行頭取
- エドヴァンヌ・ホッジズ……………ホッジズの娘
- ザヴィア・ルイス・エントワーク……………ホッジズの秘書
- ホピング……………ホッジズの従者
- ハンス・サマラッド……………トランスコンチネンタル号の広報担当
- ノア・ホール……………工学技師。技術家政治主唱者
- メイボン・ラケット博士……………精神分析学者。ホッジズの随行者
- アイヴァ・ポパス博士……………ホルメ心理学者
- ゴットリーブ・イルトウーム教授……………ゲシュタルト心理学者
- Ｌ・リース・ポンス……………統合心理学者
- マイケル・ロード……………ニューヨーク市警察の警部補
- ローレス・ブラック……………シカゴ警察検視官
- タイタス・ナット……………トランスコンチネンタル号車掌

第一部 無名氏 行動

ニューヨーク 土曜、午後10時30分

「……ほどなくご覧いただく大陸横断列車を目のあたりにされますと、かならずや皆様方は大きな驚きを味わわれるものと存じます。この列車は終点まで乗り換えることなしに走りつづけますから、それに要する時間は記録的なものとなること言うまでもありません。正しくわれわれは新時代に生きるものでありまして、あらたなる規範、あらたなる秩序を選ばねばならぬことは、言うまでもないのであります。では、テクノクラシーの代弁者たるわたしは、皆様方を心から歓迎いたしたく存じます」

「ありがとうございます。ホールさん。ご苦労さまでした」

最新鋭のトランスコンチネタル特急の広報を担当するハンス・サマラッドは、マイクをしつかりと握りしめたホール氏の指をはがした。相手が誰であろうとも、マイクを五分以上も使うべきではない、とハンスは考えていた。

ホール氏がのろのと立ち去ると、サマラッドはひたいをぬぐった。おりからグラランドセントラル・ターミナルのコンコースを、人目をひかずにはおかぬ集団が横切つて来た。インタナショナル都市銀行の頭取であるサボット・ホッジズは、娘と秘書と従者のほか、三人の赤帽をひきつれていた。ホッジズ頭取は人目につかぬよう、こっそりと車室に乗り込むつもりだったらしいのだが、この恰好では無理というものであった。

ド・ホーム・ウィークみたいだわね。……ところで、あのオーケストラ気に入ったわ。あなたはど
う?」

急に話題が変わった。

「なんとも答えられないな」とサマラッドは言った。

「ここんとこ忙しかったものだから、仕事一本槍だったんだ。でも、気に入ってもらえてよかった。
それはそうと、例のこと忘れちゃいないだろうね。展望車のデッキに立ってポーズをとってくれる約
束を、さ」

エドヴァンヌ・ホτζジズは声をあげて笑った。いかにも楽しそうな笑いだった。

「もちろんよ」と言い、小声でつけ加えた。「それからお花をありがとう。うれしかったわ」

一方、彼女の父親は赤帽にこっそり合図をしていた。

一刻も早く列車に乗りたがっている。もうちょっとで旨^{うま}くいきそうなところに、サマラッドの声が
かかった。

「すみませんホτζジズさん、うちの後援者の方々にマイクでちよつと。大袈裟にお考えにならないで。
ほんの一言で結構なんです」

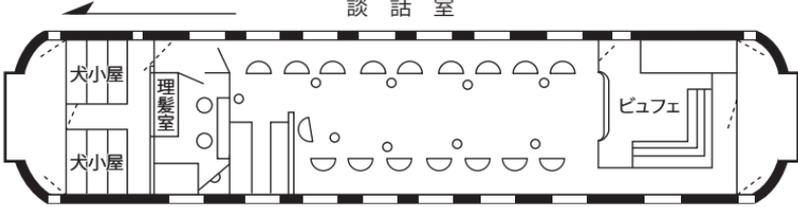
逃げ道を断られた銀行家はぶつぶつ言いながらマイクを握った。

「紳士淑女の皆さん!」彼は怒鳴った。「エヘン、皆様はひとことご挨拶申し上げる機会を得ました
のは、わたしの欣快とするところであります。わたしたちは正に、夢の列車の処女旅行に出発せんと
しております。鉄道会社のご好意に依って、わたしもこの楽しい旅に招かれました。この場をお借り
して謝意を表します。ありがとう、と」

冷蔵車



談話室



○ 散髪椅子 ◡ 安楽椅子 ○ 灰皿台

娯楽車



◡ 大型椅子 ○ 小型椅子 T. 無線電話
R.V. 蓄音機 B. ブリッジテーブル

マイクを返しながら銀行家は

言った。

「さあサマラッド。乗せてもらおうか」

サマラッドはにこりと頷いて、エドヴァンヌにしっかり腕をつかまれたまま、ホッジズの一行とともに進み始めた。

「お父さまもお気の毒ね」

彼女は笑顔でサマラッドに語りかけた。

「大のスピーチ嫌いなんですもの」

広報担当者はもう一度おでこの汗をぬぐってから、あたりを見回した。すでに夜の十時になるろうとしていた。これが平素のターミナルならばほとんど人影がないところだけれど、今夜ば

かりはあふれんばかりの人波で活気に満ちている。ロープで仕切られた通路が、ヴァンダービルト・アヴェニュー側の階段からフロアを横断して、二十六番フォームの入口に通じている。そしてそこにはトランスコンチネンタル号が偉容を誇るように、はじめての乗客たちを待ち受けているのだった。入口の近くでは、何時間も前から人気バンドが景気づけの音楽をながしつづけており、少し離れて設置されたマイククロフォンのところではサマラッドが、名士をつかまえて一言でも喋らせようと苦心している。この日のために飾り立てられた（そう言えば駅の建物全体がそうだけれど）西側のバルコニーも、だだっ広いコンコース自体も、世界一有名な、そして世界一宣伝のゆきわたった列車の出發を見ようとして集まったひま人や弥次馬、新しがり屋——たいいていの者がイヴニングにトップハットといういでたちだ——で埋めつくされていた。喧噪、興奮、喧噪、興奮、喧噪。

このトランスコンチネンタル号は、苦勞や想像力なしでスンナリと生まれて来たわけではなかった。それは大空の旅からの挑戦に対する鉄道の返答であった。航空機の超速度に対し、こちらは超豪華でむくいたのだった。それは言うならば一九二八年の「陸の巡航船」の發展とでも言うか、列車の持つ概念を大幅に変更し改良したものであった。娯楽車に展望車、ラジオ、ヴィクトローラ、ダンスホール、無線電話室がふた部屋、ゲーム台に御婦人専用の美容室。談話室には世話係と理髮師、誰でも頼める速記者がいる。ピュッフェがあり、個室の犬舎が六室。客車の後部車輛は召使いや小間使いの寢室になっていた。そして客室のつづき部屋はツインベッドと安楽椅子を二脚も用意した寢室と、洗面所および三個のトランクと手荷物を収納できる荷物室から成っている。そして従来の列車には見られなかつた新機軸は、シャワー付きのプール車であった。これまでのウェスタン行ききの列車で見かけたような、キャンバス張りの間に合わせではなく、こちらは本物のタイル張りで、プルマンの車輛工

場で特別に設計され建造されたものなのだ。実際問題としてみた場合、建造するのは格別やつかいなことではなかったけれど、なんといつても前例のない珍しいものだったから、これが公開されたときは強烈な関心の的となった。大陸を横断するこのトランスコンチネンタル特急は、ノンストップであつて、今回の処女旅行では五月十三日土曜日の午後十時三十分、ニューヨークのグランドセントラル・ターミナルを出発すると、きっかり三日間を走りつづけた暁に、火曜日の午後十時三十分、サンフランシスコに到着することとなつていた。

広報担当を仰せつかつたサマラッドは処女旅行を盛り上げるために、何からなまでの責任を負わされていた。一般公開の日程を、ターミナルにおける式典を、マイクロフォンを、フラッシュライトを、バンドを、そして祝辞を手配した。彼はまた、この大切な処女旅行では招待客だけを乗せるべきだと提案した。紳士録からピックアップされた招待客名簿には、著名な実業家や専門家、科学者や芸術家その他、有名人が含まれていた。

いま、ほつとひと息いれて、彼は、自分の計画の進行状態を眺めていた。他人を誘い込みそうな笑顔、楽しそうな様子。この背のたかい陽気なドイツ系の青年は、群衆の頭の上を見渡していた。喧嘩は一向に衰えそうにない。青年の背後ではバンドが流行歌の明るいメロディを演奏しはじめた。

腕を上げるとサマラッドは時計を覗いた。十時を十分過ぎてゐる。今頃あの列車のそばではフィルムを回すニュースカメラマンの凝視を浴びながら、大統領の祝辞が始まつてゐるはずだった。この演説がすめば、残されたのは展望車の撮影だけ。やがて列車は軌道を迂^{すべ}り、西部めざして出発して行く。彼はエドヴァンヌと並んで展望車のデッキに立つつもりだった。だが彼女は父親の秘書のエントワークのやつに引き止められてゐるとみえ、なかなかやつて来ない。何をしてゐるのだろうか。